

「大和政権成立とその直後に起きたこと」

記紀と考古学から

- ・ 政権を担った2つの勢力
- ・ 巨大な奈良湖の消滅
- ・ 手研耳命の反乱の結果

2022年10月8日

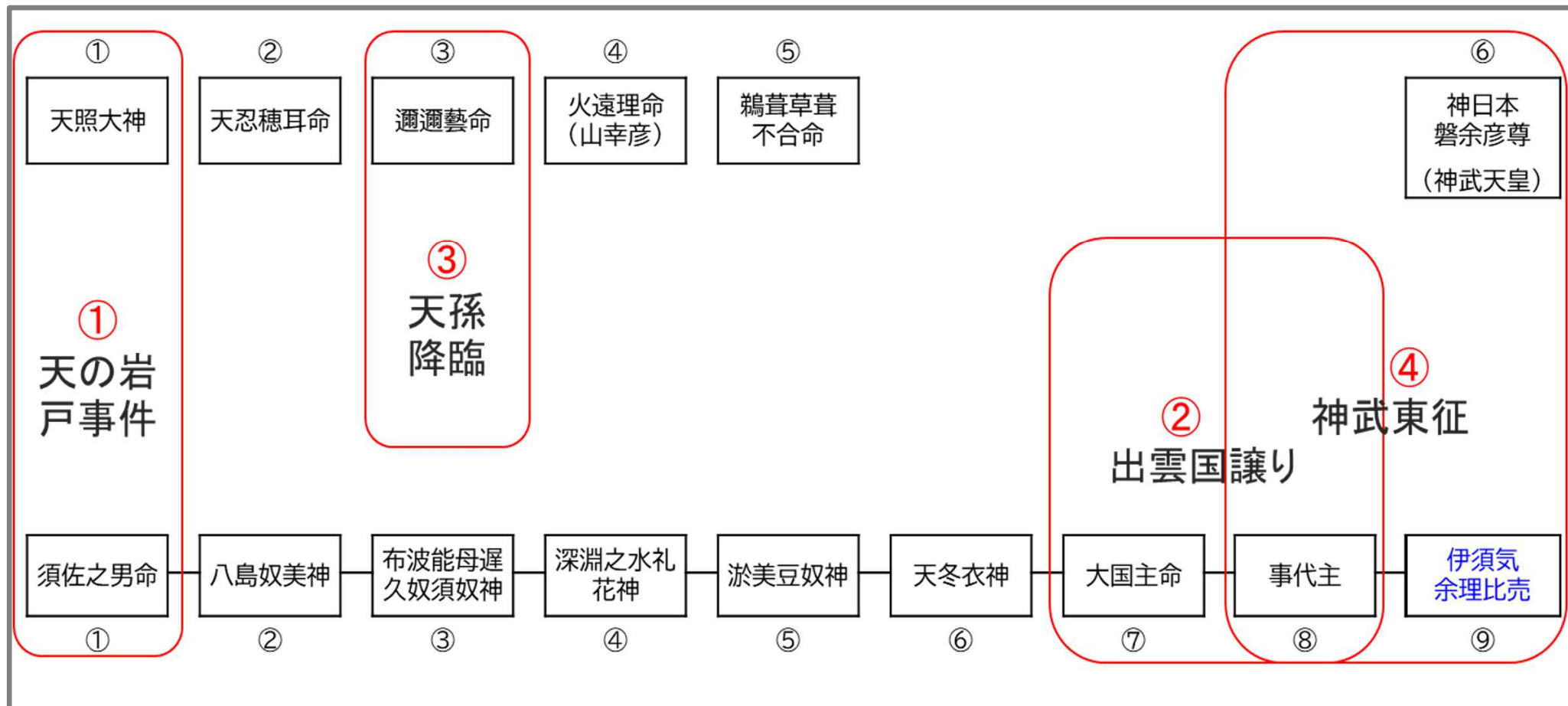
丸地 三郎

大和朝廷成立前

前提条件

- 大和政権成立前の出来事と時系列
 - 記紀の神話として書かれた出来事を、時系列順に並べ直し、
 - 神武東征以前の出来事を確認する。
- 大和入りする以前の、敵対者出雲族の勢力範囲を確認する。
 - 青銅器の副葬と埋納状況
 - 銅鐸・武器型祭器の分布
 - 戦争遺跡の分布
 - 高地性集落の分布
 - 神社と主祭神の分布
- 大和政権成立の時期について
 - 記紀の年代については、参考とにならない。
 - 魏志倭人伝の記述は、確定年代がある。
 - 天皇の世代数から、推測は可能

大和政権成立前の出来事と時系列

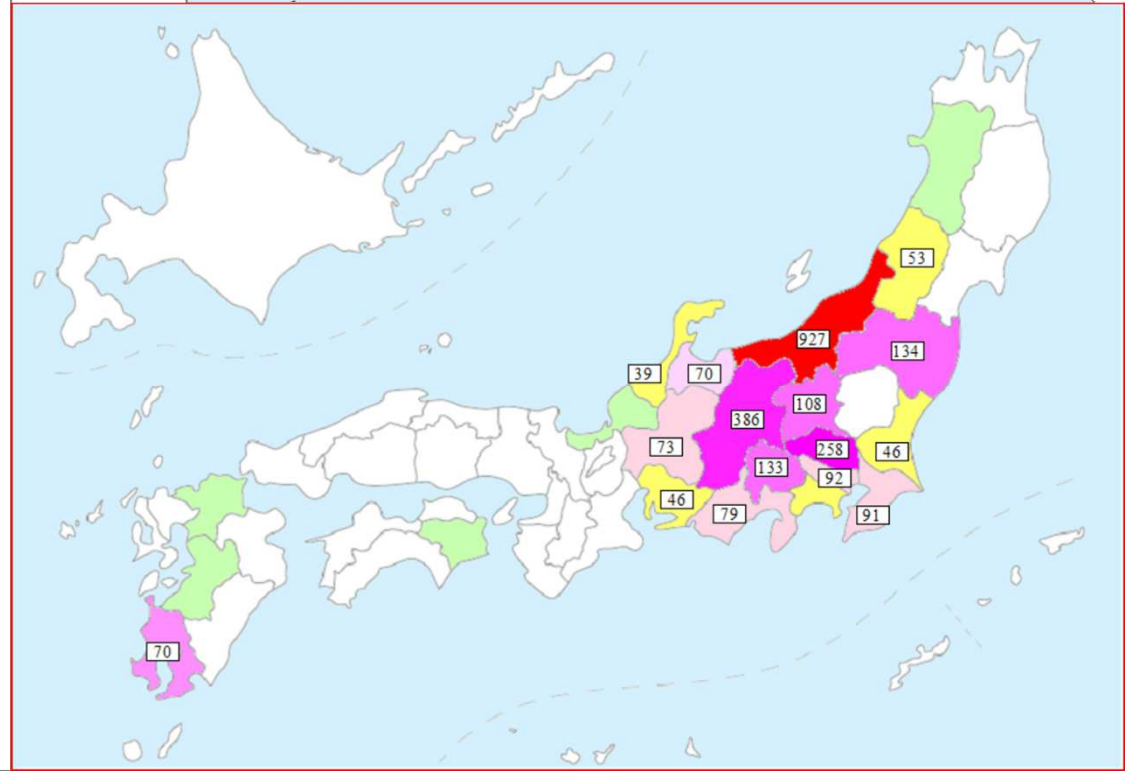


- 神武即位をもって、大和政権の成立とする。
 - 弥生時代が終焉し、大和に天皇を中心とした政権が成立し、古墳時代・飛鳥時代・奈良時代に連なる。
- 神武即位に至る経過は、上記の図が示す。
- 魏志倭人に記される倭国乱(倭国大乱)があり、出雲の国譲りが行われ、その直後に神武東征が行われたと見る。
- 神武東征の結果、大和政権が発足した。このような視点から、話を進める。

出雲族の勢力範囲

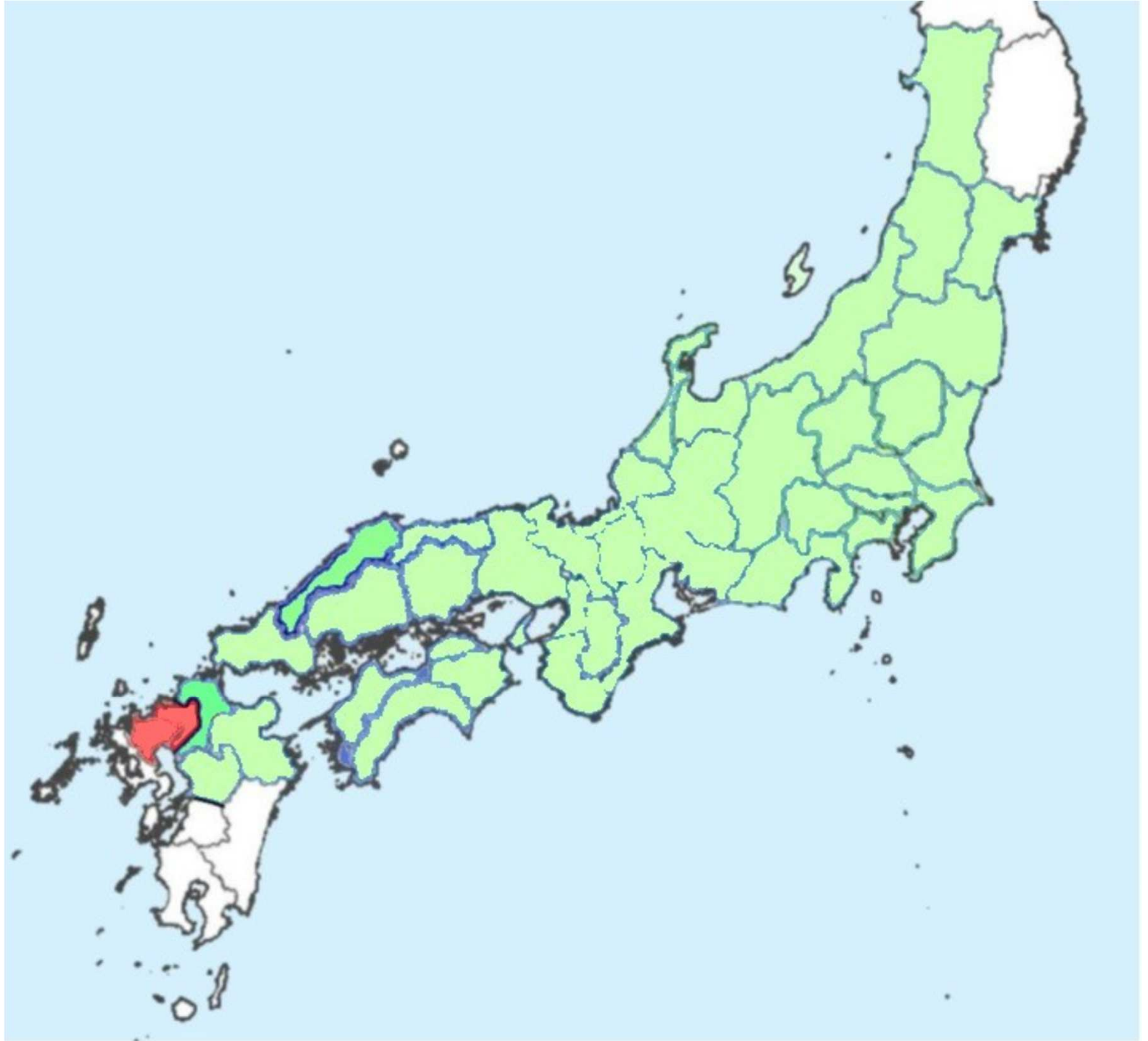
青銅器埋納と神社の祭神の分布図から

- ・ 青銅器埋納の分布図と神社の祭神の分布図は、その両方で、出雲族の支配地を表している。
- ・ 青銅の武器祭器と銅鐸の分布は、支配地の拡大状況とその結果を示し、更に、氷川神社等・諏訪神社の分布は、その支配地域の拡大を示している。
 - ・ 氷川・諏訪の両神社のすっぽりと抜けた栃木県は、なんと、味耜高彥根神を祭神とする神社のある地域。
 - ・ 味耜高彥根神の行動範囲は、東北から、岐阜の藍見の喪山の神社に祭られる。
 - ・ その後に本拠地(母親の故郷は宗像)に戻り、大乱で戦い、死亡したと考える。
 - ・ 子孫は残っていない。
- ・ 出雲族の支配地を、東北まで広げると、拡大のし過ぎとの批判が出そうだが、
 - ・ 高地性集落の分布・北陸の天王山式土器の分布・アメリカ式石鏃の分布などの遺跡・遺物で確認できる。



天孫族と出雲族の支配地域区分(出雲族最盛期)

- 出雲族の支配地域の区分
 - 埋納・副葬区分
 - 戦傷遺跡分布
 - 青銅祭器の分布
(小銅鐸を含む)
 - 主要遺跡
 - 祭神による神社分
- ✓ 天孫族: 赤系統色
- ✓ 出雲族: 薄緑系統色



倭国乱 : 北九州の戦乱と青銅器の埋納



26-1 姿を現した平原遺跡
中央の方形周溝墓が王墓である平原1号墓。昭和40年の発掘調査当時の写真。

伊都国歴史博物館常設展示図録より4点



⑦素環頭大刀
全長80.2cm。ほとんど反りを持たず、直線状をなす。

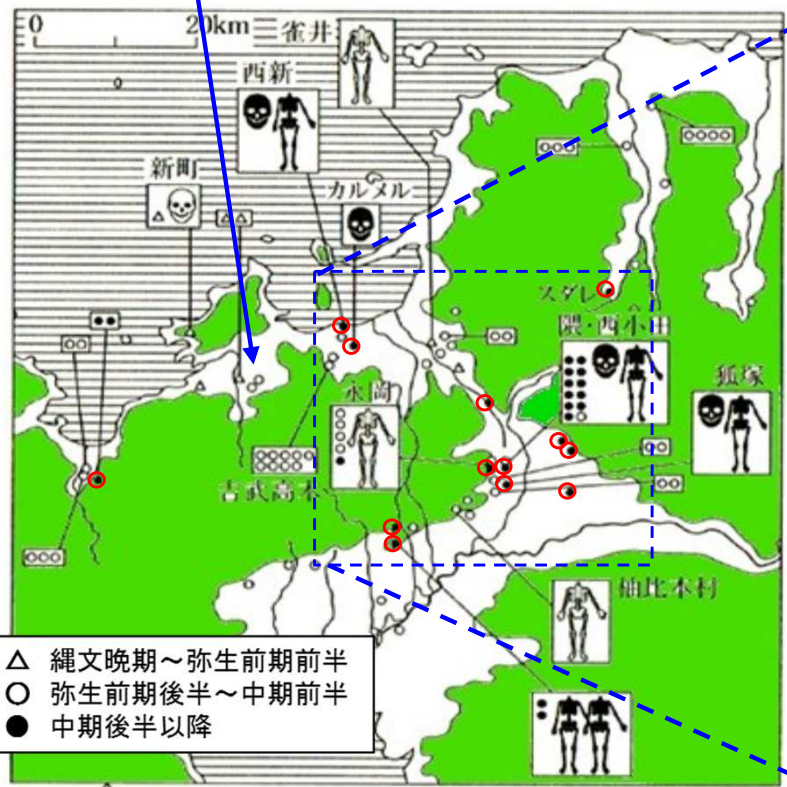
須玖岡本の王墓



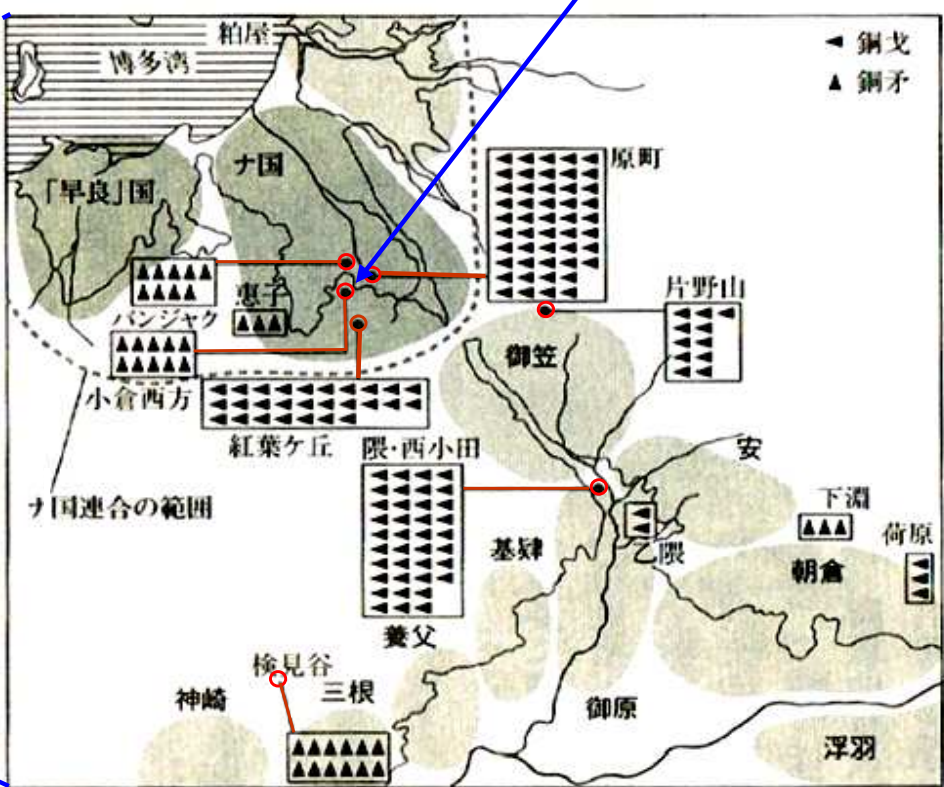
須玖岡本(白石)鏡
王墓に副葬されていた鏡の中で、最も美しい鏡の一つ。鏡の裏面に「須玖岡本」と刻まれている。直径18.5cm。
ガラス勾玉
須玖岡本に副葬された勾玉。表面が磨かれたガラスで、表面が滑らかで、中央に小さな穴が開いている。長さ5cm。須玖岡本王墓に副葬された勾玉の中で最も大きな勾玉である。長さ5.2cm。九州最大。
多岐式銅剣
須玖岡本の銅剣は、須玖岡本の銅剣の中で最も美しい銅剣の一つ。表面が磨かれた銅で、表面が滑らかで、中央に小さな穴が開いている。長さ18.5cm。須玖岡本王墓に副葬された銅剣の中で最も大きな銅剣である。長さ18.5cm。九州最大。



王墓の復元模型



寺澤薫 王権誕生より



ナ国と周辺のクニゲニの呪禁

出雲の国譲りの伝説と遺跡

出雲大社境内遺跡と出雲大社本殿の復元

神戸大学建築史研究室



出雲大社本殿復元図 透視図

Copyright © 足立・黒田・中江研究室



加茂岩倉遺跡銅鐸39個



荒神谷遺跡



青谷上寺地遺跡



諏訪大社

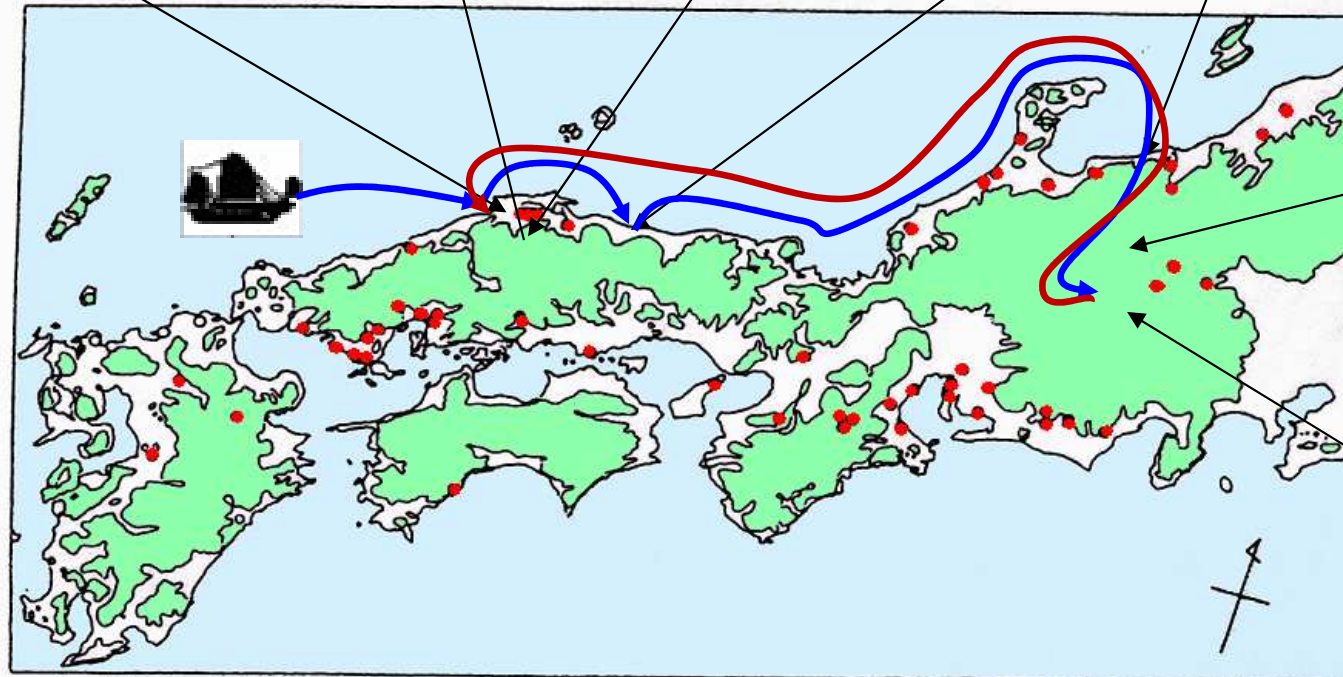


図49 「倭国乱」の頃の典型的な第二次高地性集落(寺沢薫「王権誕生」)

受傷人骨から弥生時代には、限定した地域で戦争があったことが判り、戦後処理で青銅の武器・銅鐸が埋納されたことを考えると、出雲国譲りと遺跡・遺物との関係が、信憑性を帯びてくる。

神武東征の経路 と第二次高地性集落

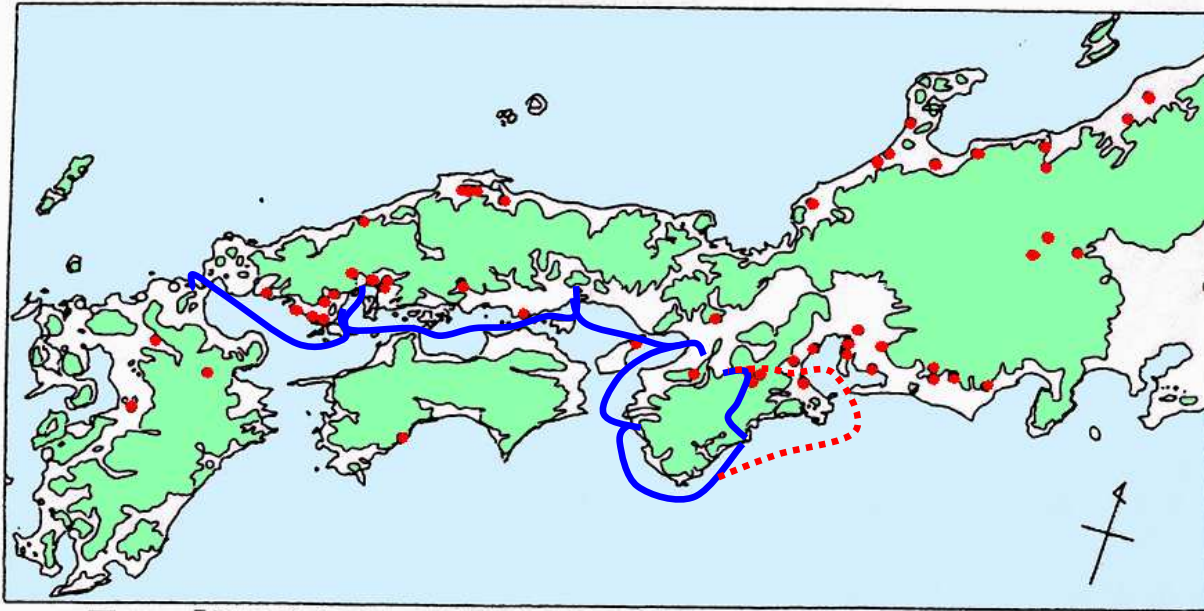
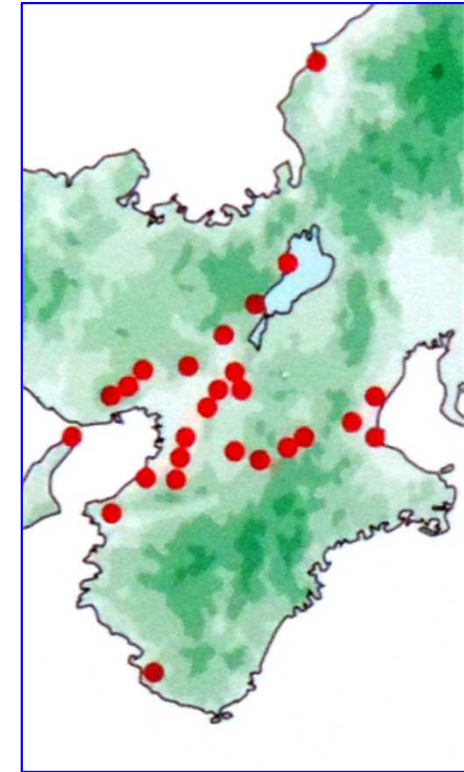


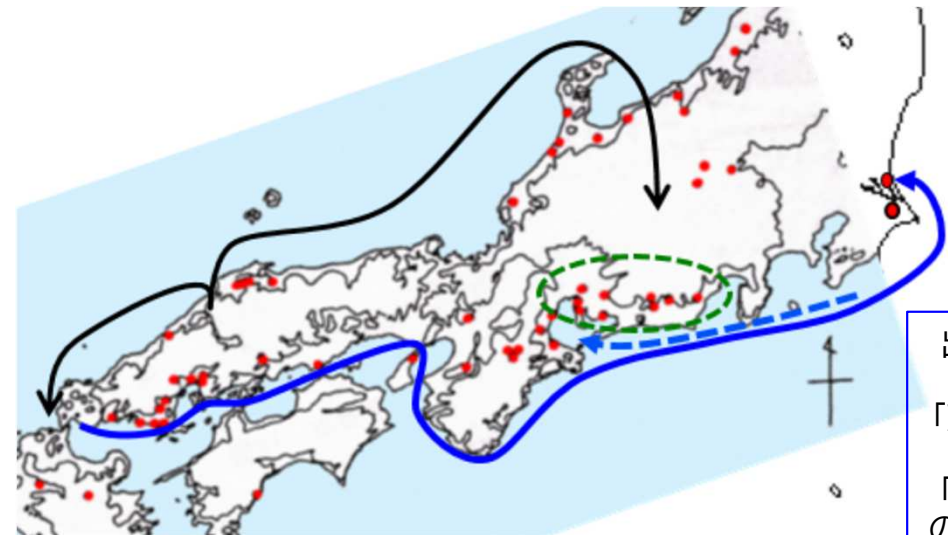
図49 「倭国乱」の頃の典型的な第二次高地性集落(寺沢薫「王権誕生」)



倭国乱」と高地性集落論 観音寺山遺跡 若林邦彦著より
弥生時代後期から古墳時代初頭の高地性集落

- 記紀等に記された東征 -

- 日向にいた、天孫族の五瀬と神武は、東征を宣言
- 北九州の岡田宮に1年滞在
- 安芸(広島)の多祁理宮に7年滞在
- 吉備の高島宮に8年滞在
- 軍と整え大和へ向かう
 - 大阪・白肩津に上陸、生駒山の西で、敗戦。
 - 紀伊川近く・紀国の男之水門で五瀬死亡。
- 熊野で暴風に会い、2人の兄も死亡。船舶も甚大な被害。
 - 太刀をもって、八咫鳥(ヤタガラス)の案内で大和へ進軍。
 - 数々の戦いを経て、大和に近づく。
 - 長髓彦、ニギハヤヒに天の羽々矢(アマノハバヤ) を見せる
 - ニギハヤヒは、長髓彦を殺し、大和の地を譲り、神武に従う。
- 神武は大和に入り、都とする。
- 神武は、正后妃として、事代主の娘を迎える。(日本書紀)



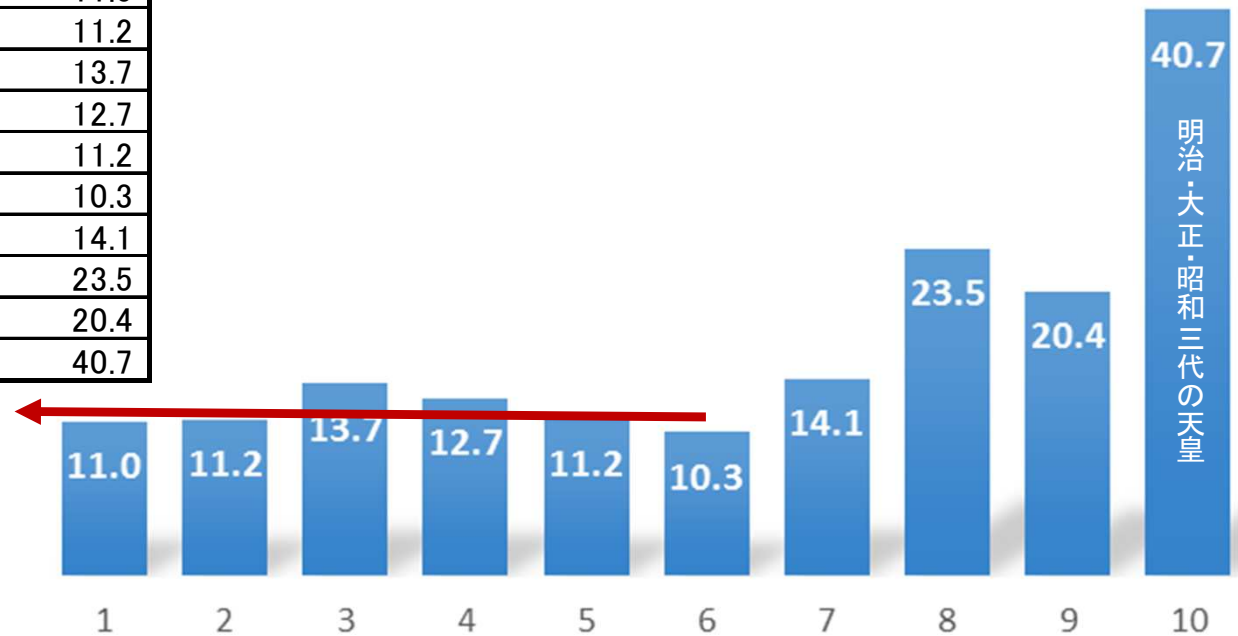
出雲国譲りの立役者
「建御雷の神」と
「経津主神」の進軍ルート

神武東征・即位の時期

- 安本美典氏の天皇活躍年代の推定方法自体は秀逸な方法なので、その方法を利用させてもらう。
- 安本氏の凡そ400年間で平均する方法は、きれいだが、現実には即していないため、別の方法を試みる。
- 10代毎に平均をとってみると、平準化したグラフと近いイメージのグラフとなる。この平均とグラフを採用する。

代数	天皇	没年	10代の 年数合計	平均年数
31	用明	587年04月09日		
41	持統	697年08月01日	110.3	11.0
51	平城	809年04月01日	111.7	11.2
61	朱雀	946年04月20日	137.0	13.7
71	後三条	1072年12月08日	126.6	12.7
81	安徳	1180年02月21日	112.3	11.2
91	後宇多	1287年10月21日	102.6	10.3
101	称光	1428年07月20日	140.7	14.1
111	後西	1663年01月26日	234.5	23.5
121	孝明	1866年12月25日	203.9	20.4
124	昭和	1989年1月7日	122.0	40.7

10代毎の平均在位年数



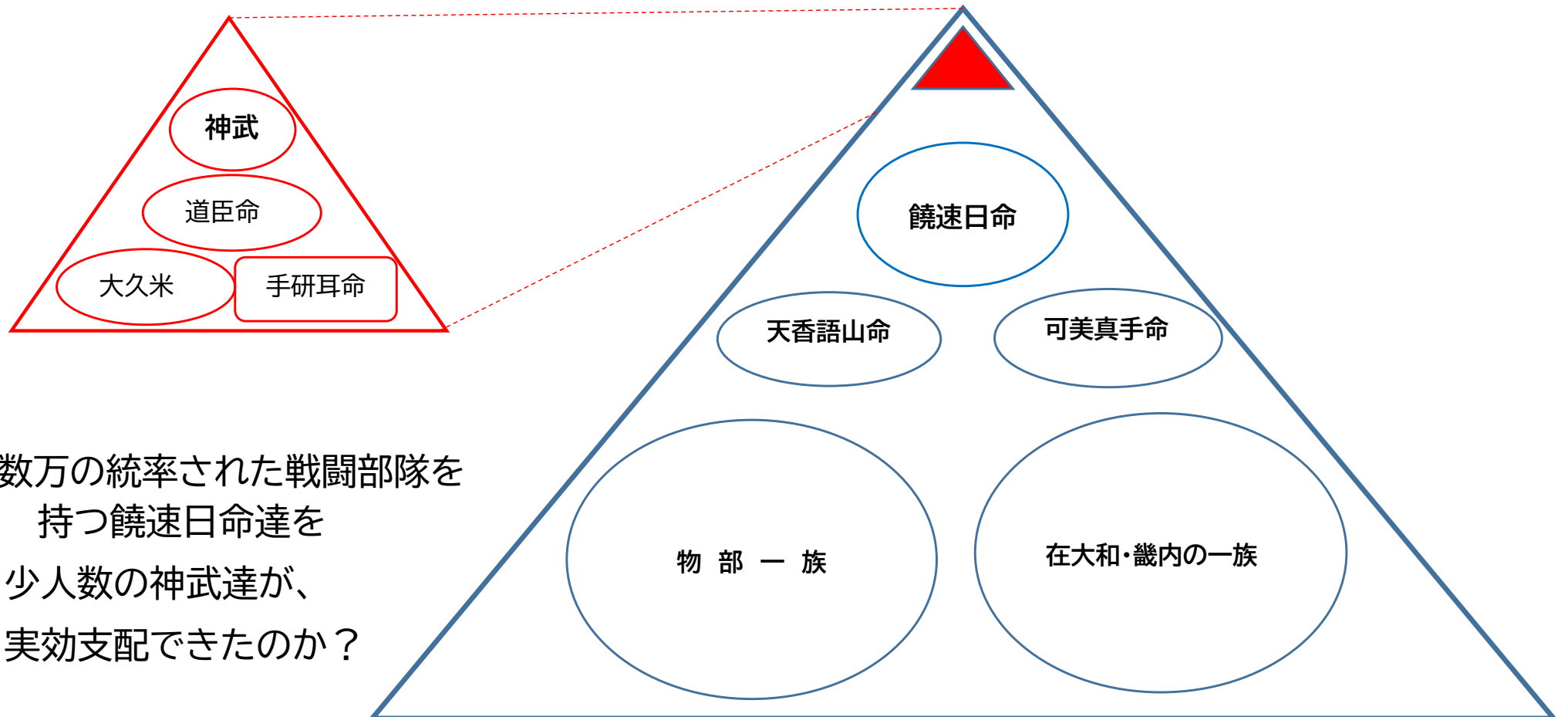
- 神武～用明の31代の天皇の推定
 - 古代へむけて登ってゆく、「代による梯子」のピッチは約11年となる
- 用明天皇没年の587年と、 $31代 \times 11年 = 341年$ から神武即位の年を算出すると、 $587年 - 341年 = 246年$ となる。
- この神武天皇即位:西暦246年が、統計上推測される。この年代を、歴史上の文献記録等と照合して、推論すると、正しい年代に近づくものと考えられる。

大和朝廷成立時の神武一行

- 大和入りした時、神武一行の中で、九州から随同行した主だった人々と装備品
 - 道臣命(大伴の祖)・大久米・手研耳命
 - 固有名詞の出てくる人はこの3人。
 - 久米歌の場面から、久米の人々が複数いたことが推定される。
 - 椎根津彦(しいねつひこ)=珍彦(うづひこ)は、途中随行者
 - 高倉下・八咫烏などは、熊野より随同行した人々
 - 九州から随同行した人々の持ち物
 - 熊野灘の遭難で、装備してきた甲冑・武器(重い金属製品)などは、全て海中に没し、携行できたものは、身の回りの品物だけと推定される。
 - 天孫族の印である天羽々矢一隻と歩鞞は、かろうじて帯同して持ち出したものか？
 - 大和侵攻のため携行した武器は、丹敷戸畔から調達したものと推定される。
- 大和入りした時の神武一行
 - 九州から随同行した人員は、上記3人+久米一族など。及び、吉備などから参加した若干の人員。
 - 熊野より随同行した人々、及び、その後、傘下に入った宇陀の弟狛など。千人程度か。
- 饒速日命(ニギハヤヒ)傘下の大和防衛軍。数千人～数万人。
 - 九州から饒速日命に随同行した物部一族
 - 畿内在住の弥生渡来系の人々・出雲の支配下に居た人々
 - 饒速日命の支配下に入って居た先住民(ツチグモ・旧縄文人)
- 大和朝廷成立時の状況
 - 九州から神武に随行してきた人員は、少人数で、大和朝廷を成立させた。
 - 大和朝廷の大多数は、饒速日命一族と出雲一族で構成されていた。

大和に入った神武一行と饒速日命

- 神武達は、熊野から随同行したメンバーは、多くとも200名と推定。
 - 海難事故で生き残り、九州から随行できた人員はもっと少ない。
- 一方、饒速日命達は、
 - 九州から饒速日命に随行した物部一族が多数の兵士を支配下に置く。
 - 長髓彦の傘下にあった兵士多数を、可美真手命(長髓彦の妹との子)の下に置く。



- 数万の統率された戦闘部隊を持つ饒速日命達を
少数の神武達が、
実効支配できたのか？

饒速日命と物部一族 鳥越憲三郎氏の書籍「大いなる邪馬台国」より

- ✓ 初代天皇:神武に九州より随行してきた人で名前が残っているのは2名。
- ✓ それに対して、饒速日命に随行してきた沢山のメンバーの名前が残って居る。

旧事紀(先代旧事本紀)に記載されている。

- 船長:跡部首らの祖 天津羽原
- 梶取:阿刀造らの祖 大麻良
- 船子:倭鍛師らの祖 天津真浦
- 笠縫らの祖 天津麻良
- 曾曾笠縫らの祖 天都赤麻良
- 為奈部らの祖 天都赤星

五部人

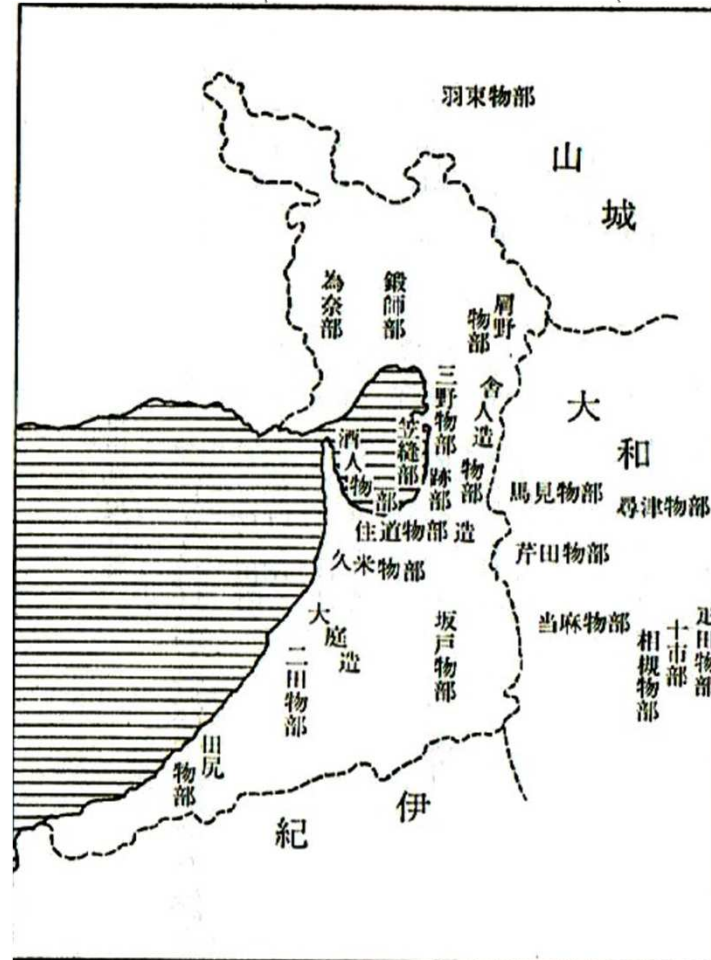
- 物部造らの祖 天津麻良
- 笠縫らの祖 天勇蘇
- 為奈部らの祖 天都赤占
- 十市部首の祖 富富侶
- 筑紫弦田物部らの祖 天津赤星

五部造

- 二田造
- 大庭造
- 舎人造
- 勇(曾)蘇造
- 坂田造

25部 兵杖を帯びて供奉

- 二田物部
- 田尻物部
- 當麻物部
- 赤間物部
- 芹田物部
- 久米物部
- 馬見物部
- 布都留物部
- 横田物部
- 住道物部
- 狭竹物部
- 讃岐三野物部
- 大豆物部
- 相槻物部
- 肩野物部
- 筑紫聞物部
- 羽束物部
- 播磨物部
- 尋津物部
- 筑紫贄田物部
- 鳴門物部
- 浮田物部
- 菴宜物部
- 疋田物部
- 酒人物部



河内・大和の物部一族の分布

饒速日命勢力の基盤

- 旧出雲一族が畿内を治め、その基盤を饒速日命が受け継いで、拡充した状態と想定する。
 - その勢力範囲は、奈良・紀伊・大阪・兵庫・京都・滋賀・三重に跨がるものと推定。
 - 饒速日命は九州から随行した物部一族を従えていた。
 - 各地の豪族をとりまとめる形で支配を行い、物部や旧長髓彦のグループの指揮系統を持っていたと推定する。
 - 経済的基盤は、水田耕作などを取り仕切る豪族にあったと思われる。
 - 旧出雲族が、数百年間、支配を行っていた支配体制は、有効であったと推定。
- 神武をトップに仰ぐことになっても、饒速日命達の支配体制・経済基盤は、別に変わらなかったと推定する。
- 饒速日命達が、懸念したであろう神武支援部隊
 - 河内湖・盾津付近で確認した膨大な数の船舶と兵員を知っていたはずで、和平決定時には、「その大部隊が、神武本体に遅れて到着する」と、考えていたと推定する。
 - しかし、遭難した熊野灘からは現れなかった。
 - 神武東征に先立ち、畿内を超えて、九州から関東の果てに行った経津主神・建御雷神も懸念。
 - 大和朝廷成立後、神武体制を支える貴重な勢力となったはず。
 - この懸念と「実際には起きなかった」ことへのギャップは、大和朝廷成立時に影響があったはず。
- 少人数の神武勢力では、饒速日命達の支配体制を崩せる力はなかったと推定する。
 - 圧倒的な武力をもっていたのは、旧饒速日命の側。
 - もし、神武・饒速日命の両者のグループ間で、混乱・騒動が発生した場合には、神武側には、さらに深刻な事態になることが懸念される。

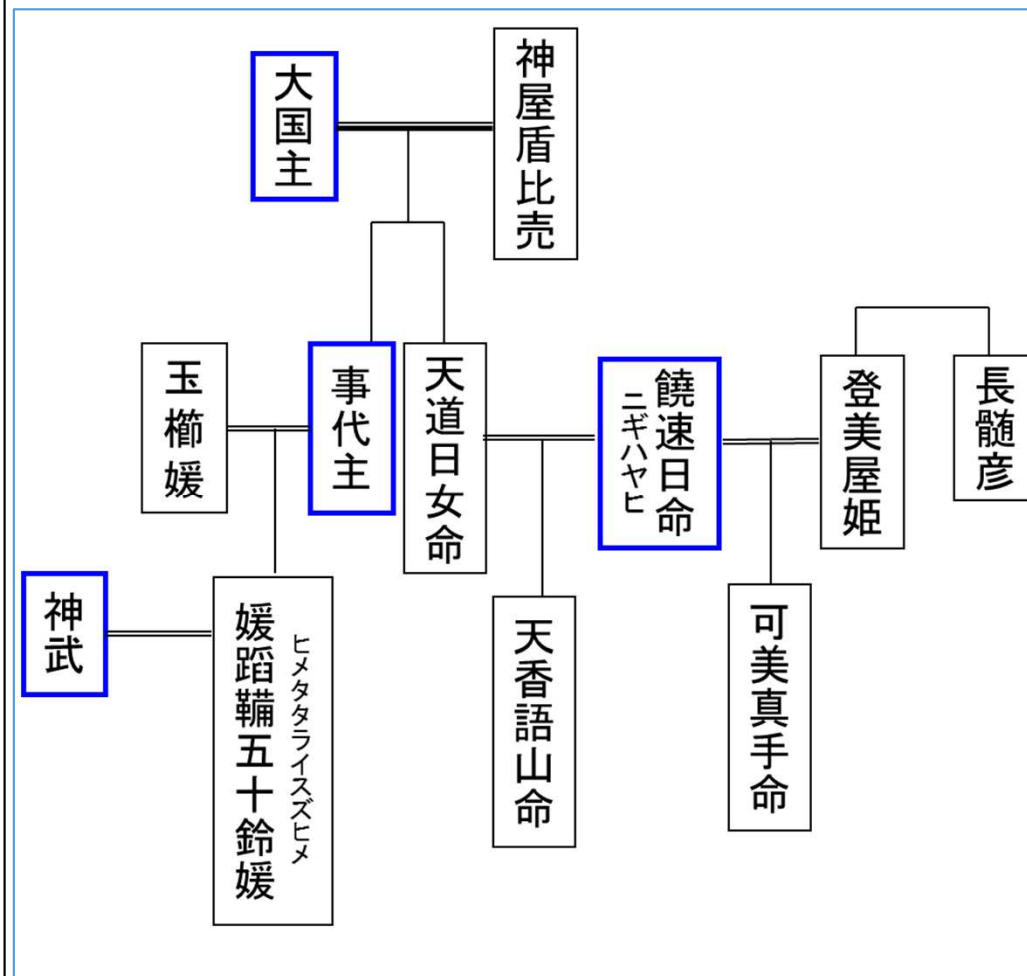
神武達の取り得る手段・基盤は何か？

- 神武達の取り得る手段・基盤は何か？
 1. 饒速日命の協力でやっと保たれるこの状況を維持・継続することが、不可欠
 - 饒速日命が叛意を持っていないことは、幸いなこと。
 - 神武天皇の支配を好ましくないと考える人が、饒速日命傘下には多かつたはず。
 2. 武力を使わずに敵対地域を有効支配する常套手段
 - 政略結婚。 大国主命が武力を背景に多用した。
 - 支配したい地域の権力者の娘と結婚すること。
 3. 外敵を作り出し、戦争を行うこと
 - 全体の結束を高め、内部抗争意欲を減少させる方法。
 4. 九州・吉備から支援部隊を呼ぶこと。
 - 九州留守部隊は、出征した家族の帰りを待っていたはず。
 - 若干の人々を呼ぶことはできるが、出征できる人は皆、参加したはずで、期待薄か。
 - 吉備は、上記同様だが、大和へ移った人々がいた可能性はある。
 5. 建御雷・経津主神(東征以前に東へ領地を受け取りに行ったはず)を呼ぶこと。
 - 任地を正しく知り、使者を出し、大和へ到来するように指示をだす。
 - 鹿島・香取・安房などから、慌てて、彼等又は、その子孫が馳せ参じたはず。
- 当初の神武と道臣命・大久米・手研耳命などに：
 - 大和の国を譲られて、ホッと一息ついて、大和に入ってみたが、九州出発時の大目標であった芦原中津国全体の統治は、できそうな状況に無い。
 - 差し迫った目先のことは、まず、自分達の立場を保つこと。
 - 争う事を起こすと、武力に勝る饒速日命の一族に滅ぼされる心配があった。

神武達の最初の政策実行

政略結婚

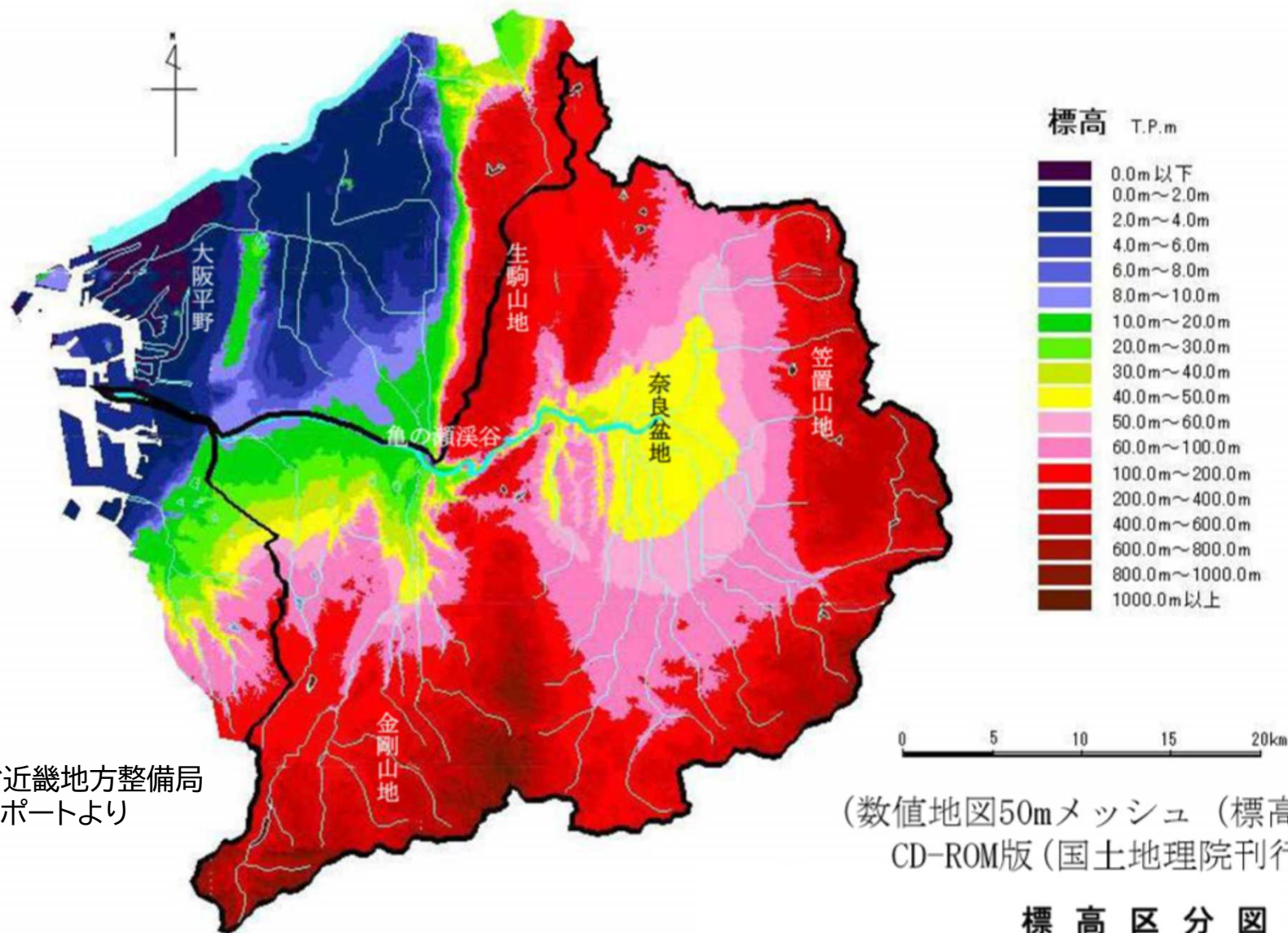
- 饒速日命は、大国主命の娘・天道日女命と結婚していた。
 - その妻の兄が事代主。
- 大和・畿内を支配してきた事代主は、この時代にも大きな影響力を持っていたものと推測される。
- 事代主は、三輪山・大神神社に祀られる。
 - 大和の守護神。別名、大物主。
- その娘に適齢期の媛蹈鞞五十鈴媛がいた。
- 神武は、九州に正妻を残してきたが、政略結婚に踏み切った。
 - 2-3月に大和入りした年の秋
 - 神武、正后妃として、事代主の娘を迎える。(日本書紀・9月)
- 大和を譲った饒速日命とその部下達にとって、神武は、敵対し難い存在となった。
 - 敵対すれば、ボスである事代主と饒速日命に仇することになってしまった。
 - この政略結婚は、神武側にとって、きわめて有効な政策であったと云える。



事代主の母 : 神屋盾比売 → 古事記
 天道日女命の母 : 神屋盾比売 → 勸注系図

目に映った大和はどんな土地・地域

- 古代の大和・奈良県の地勢を知るには、地質学のを借りるのが早道。
- 奈良盆地の四方が山で囲まれた地で、大阪側に一カ所切れ目があり大和川が流出。



奈良盆地と大和川

国土交通省近畿地方整備局の大和川レポートより

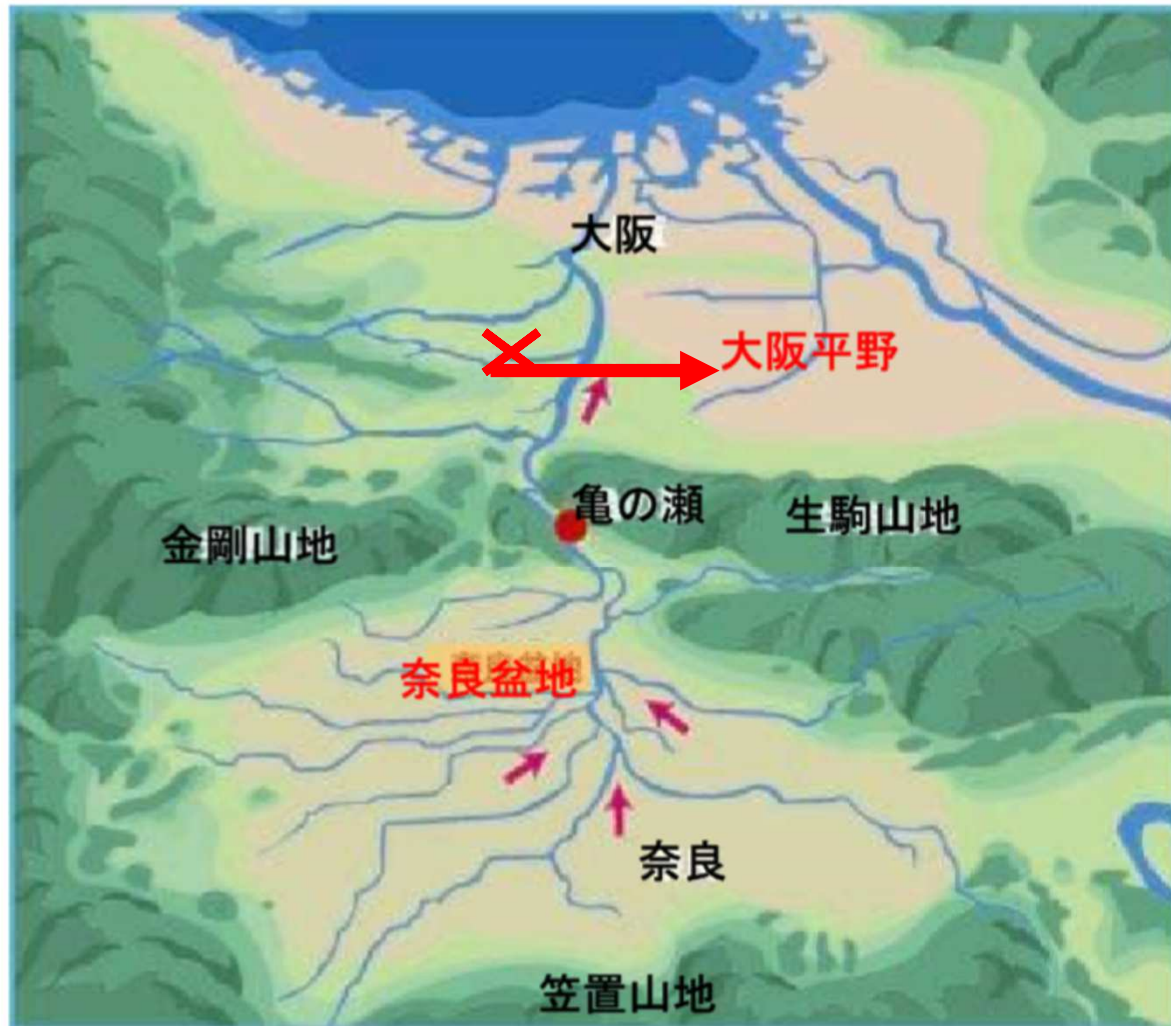
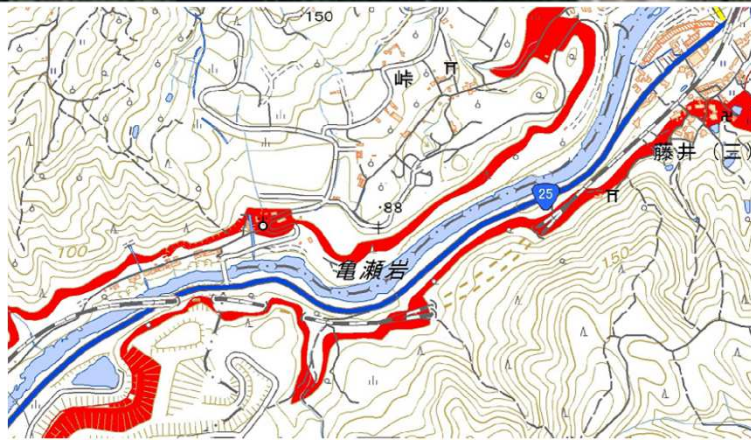


図 1.11 流域の鳥瞰図

古代にこの亀の瀬地滑りが発生していたら、
どうなっていたらだろうか？

- 左図は、奈良の東側上空から西に向かう鳥瞰図。
- 金剛山地と生駒山地の境を、大和川は流れおり、現在は、まっすぐ西に向かい大阪湾に注いでいる。
- この大阪湾に直進する河道は、江戸時代の改修工事の結果で、それ以前は、山地の間を抜けると、すぐに、右に折れ生駒山地に沿って北上し、大阪平野に有った河内湖に注いでいた。
- 二つの山地の間に亀の瀬がる。
 - ここが問題の土地で、歴史上、何回も、山崩れが発生し、大和川を塞ぎ、洪水を引き起こしてきた。
 - 亀の瀬地すべり:1931~1932年山塊が大和川方向へ移動。関西本線のトンネルが崩壊。河床が9m上がり、浸水被害
 - 巨大工事完了:杭 深礎工170本、鋼管杭工560本、排水トンネル7236m、秋水井戸54基

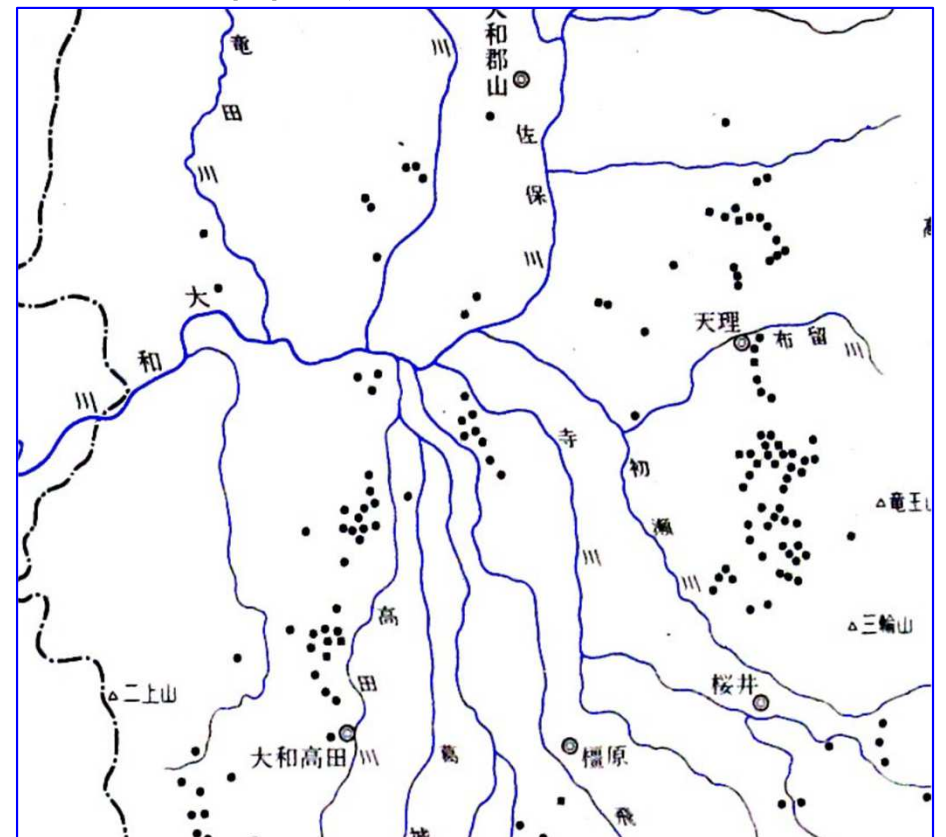


亀の瀬について

- 奈良と大阪の中間地点
- 金剛山地と生駒山地の境
- 大地滑り地帯
- 中間の写真のように河床に岩が露出
- 下図の赤色は**海拔50m+**の領域
 - 幅は約100m
 - 河床は**海拔26m**ほど、
 - 長さは4-500m(下流まで含め約1km)
- 古代奈良湖の**海拔は48m**ほど
- 赤色の領域の高さに大和川が流れていたことになる。
- 工事は、幅100m深さ20~25m、長さ500mの土砂を取り除くことになる。
- 現在の川筋は昭和7年7月の地滑りで閉塞したため、南側の岸を開削したもの。

神武達の対応

- 記紀には、神武達が、土木工事をした記述はない。
- 直後に発生した古墳時代の古墳建造には、大和川の水運が活用されたことが、考古学から指摘されている。
 - 初期の大古墳の石室には、大阪の石材が使用されている。
 - この重量物の運搬には、大和川の水運が使われている。
 - 大市など、大和川の水運を利用した市が開かれた。
- 古墳時代には、奈良湖の記述はなく、遺跡も奈良盆地の全面に及ぶ。
 - 古墳も海拔48m以下の湖だった地域に存在。
 - 右図は、大和盆地と大和川の図。
 - 黒丸は古墳を示す
- 縄文・弥生時代を通じて、存在した奈良湖が、大和朝廷成立期に突然消滅した事実は、地滑り地帯の亀の瀬の開削と云う、巨大工事が実行されたと考えざるをえない。
- いつ頃にこの工事は完成したのだろうか？



- 直接的な文献記録は、もちろん無いので、推測することになる。
- 下の表のように、大和朝廷では、天皇毎に王宮が替わる。
 - 第7代孝霊天皇の黒田廬戸宮(いおどのみや)に注目する。
- 黒田廬戸宮の伝承地は、奈良県磯城郡田原本町黒田の法楽寺。黒田駅近く、**海拔45m**
 - 唐古・鍵遺跡は、弥生中期に環濠が水没 **海拔48m**
- 水没する恐れがあった唐古・鍵遺跡より3m低い土地に王宮を構築したことは、この時期には、奈良湖は消滅していたことになる。
 - ✓ 右図は、桂川光和氏の日本建国史HPより
 - ✓ 下図は、山形大学歴史・地理・人類学論集, 第4号, 1-12, 2003年「記紀にみえる日本古代の宮号」北村 優季 著より

表 宮都一覽

史料 天皇等	延喜式(諸陵寮)	古事記	日本書紀	帝王編年記
1 神武	橿原宮	畝火之白檮原之宮	天皇即帝位於橿原宮。	畝傍橿原宮(大和国高市郡)
2 綏靖	葛城高丘宮	葛城之高岡宮	都葛城。是謂高丘宮。	葛城高丘宮(大和国葛上郡)
3 安寧	片塩浮穴宮	片塩浮穴宮	遷都於片塩。是謂浮穴宮。	片塩浮穴宮(大和国高市郡畝火山北也)
4 懿德	輕曲峽宮	輕之境崗宮	遷都於輕地。是謂曲峽宮。	輕曲峽宮(大和国高市郡)
5 孝昭	掖上池心宮	葛城之掖上宮	遷都於掖上。是謂池心宮。	掖上池心宮(大和国葛上郡)
6 孝安	室秋津島宮	葛城室之秋津嶋宮	遷都於室地。是謂秋津島宮。	室秋津嶋宮(大和国葛上郡。今掖上池南西田中也)
7 孝霊	黒田廬戸宮	黒田廬戸宮	皇太子遷都於黒田。是謂廬戸宮。	黒田廬戸宮(大和国城下郡)
8 孝元	輕境原宮	輕之境原宮	遷都於輕地。是謂境原宮。	輕境原宮(大和国高市郡。今輕大路西方)
9 開化	春日率川宮	春日之伊耶河宮	遷都于春日之地。是謂率川宮。	春日率河宮。大和国添上郡
10 崇神	磯城瑞籬宮	師木水垣宮	遷都於磯城。是謂瑞籬宮。	磯城瑞籬宮(大和国山辺郡)
11 垂仁	纏向珠城宮	師木玉垣宮	更都於纏向。是謂珠城宮也。	卷向珠城宮(大和国城上郡。今纏向河北里西田中也)
12 景行	纏向日代宮	纏向日代之宮	即更都於纏向。是謂日代宮。	纏向日代宮(大和国城上郡。今卷向檜林是也)



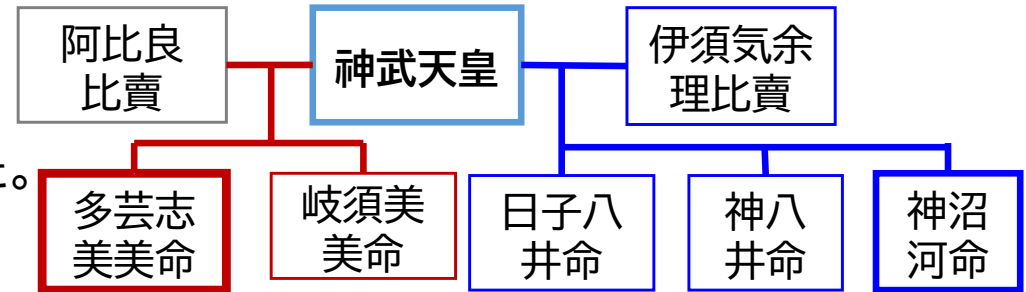
誰が、いつ、工事をしたか？

- 今、判ることは、弥生時代まで古代奈良湖は存在し、大和朝廷の7代孝霊天皇の時代の前には、奈良湖は消滅又は縮小していること。
- 以下は、推論になる。
 - 神武がこの大工事を成し遂げたと考える。
 - この巨大工事を行うだけの人手を集めるだけの機会があったのは、大和入り直後しか無い。
 - 新統率者が命令を出し、旧統率者である饒速日命と事代主がその命令を傘下の部族にくだし、競って工事に傘下するよう促すことが、唯一の機会と考える。
 - この工事を行う費用・経済負担を行う能力は、この時も、それ以降も、神武には無い。
 - 工事は、饒速日命・事代主に命令を下された部族の自己負担で行われたと推量。
 - 工事の成果物は、奈良盆地に広がる新たな耕地。
 - 河川の整備と農業用水路の工事が引き続き行われたはず。
 - 神武達は、新たな有効な土地を生み出し、分配することで、新たな権力を生み出したはず。
 - この新たな耕地の配分を上手に行うことで、神武達の権威を高めたのでは？
 - 饒速日命も事代主もない後の代では、手弁当で何ヶ月・何年もの工事を行わせる力は無かったはず。
 - 大和入り直後の神武は、謂わば窮地に立っており、それを解消する秘策を必要としていた。
『外敵』に替りに巨大工事を生み出し、実行することで、饒速日命側の武力を、“工事“という別の方向に替え、平和裏に治めることに成功したと推測。
内憂外患の『外患』を、巨大工事に振り替え、内憂を治めたものと考えます。
 - この巨大工事の実績と動員力が、古墳時代の基盤になったと推定する。

手研耳命(多芸志美美命)の反乱

古事記:

- 神武の死後、息子:手研耳命がとった行動
 - 政権の実権を把握。
 - 神武の皇妃の伊須気余理比賣を娶った。
 - 皇妃の三兄弟の殺戮を計った
- 母:伊須気余理比賣は、歌に託して警告
 - 三兄弟の内、二兄弟が手研耳命を殺害。
- 実際の殺害をした神沼河命は、二代目の天皇に就任



この反乱を分析し推理する

- この反乱には、誰が荷担していたのか？ → 九州から来た一族がこぞって荷担したと考える。
 - 道臣命(大伴の祖)・大久米 久米の一族 が荷担したはず。
 - 神武の治世中に九州から駆けつけた一族も参加したはず。

この反乱を、人々が何とっていたのだろうか？

- 事代主とその一族は、娘・伊須気余理比賣に対す破廉恥な行為を、絶対に許さなかったはず。
- 饒速日命などの命令で、天皇家に、やむなく従っていたが、常々不満を爆発させるきっかけになったのでは？
 - 神武の治世中に、九州からの一族が増加したとしても、絶対多数は、饒速日命側。

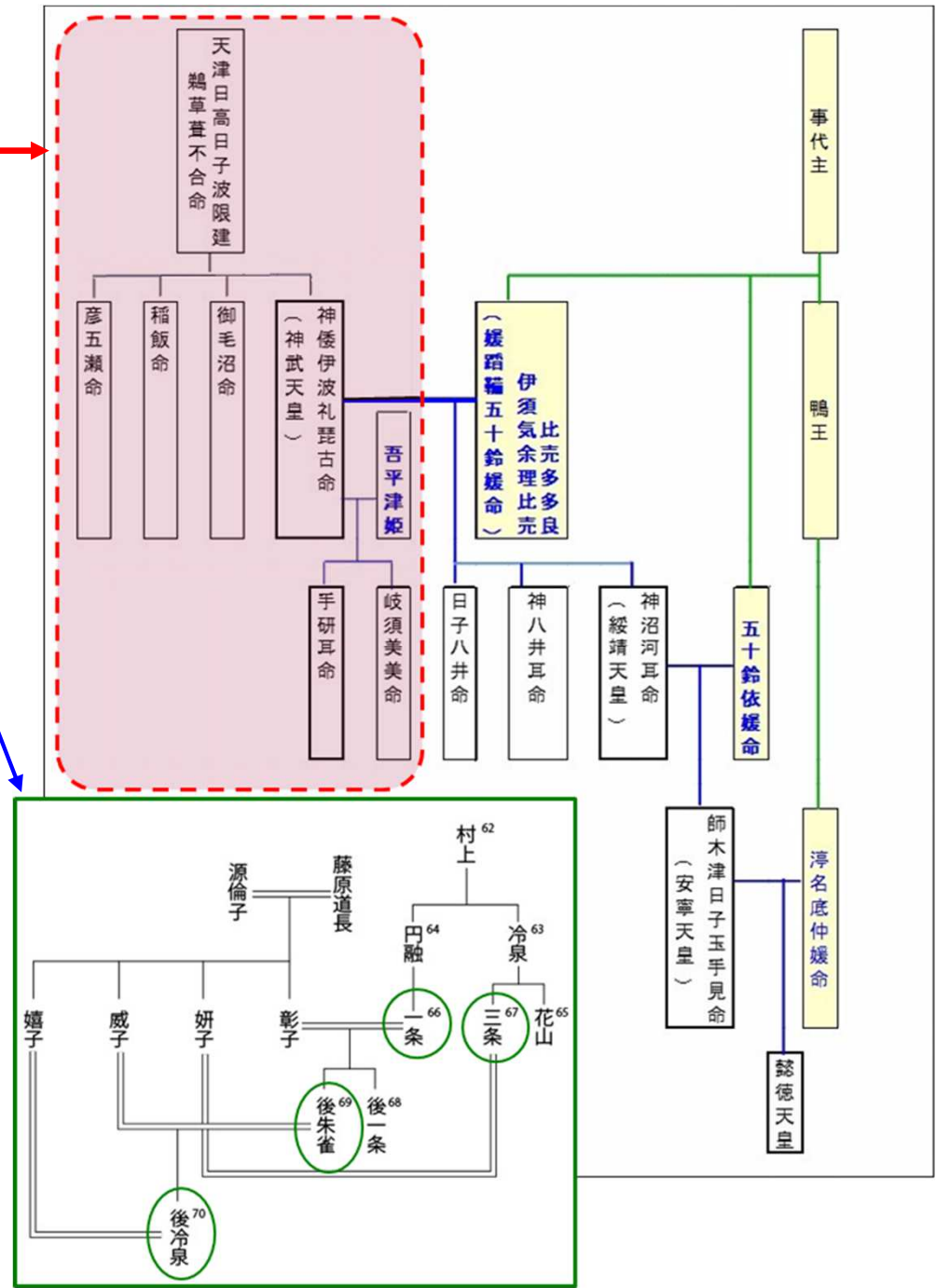
この反乱が失敗に終わった結果何が起きただろうか？

手研耳命(多芸志美美命)の反乱の後

- この反乱が失敗に終わった結果
 - 事代主とその一族の怒りは、収まらない。
 - 饒速日命側は相変わらず、圧倒的多数で、武力を持っていた。
 - 饒速日命一族は、積年の不満・恨みを、この件にぶつけた。
 - 反乱に荷担したグループを抹殺。
(後の皇位継承に関わる反乱の処分も激しい場合が多い)
 - 記紀に記されたこの反乱の結果は、単純に皇位継承の話だけが、実際には、参画した一族に対しては、生臭い、血にまみれた事件であったと考える。
- この結果、九州から来た人々は抹殺されたはず。(妻子・子供は別か?)
 - 九州の天孫族に語り継がれた神話の語り手は、いなくなった。
 - 綏靖天皇などが聞き覚えた話だけが受け継がれ、九州の地名・地理などの情報は欠落したものになった。
 - 九州の神話を受け継ぐ人々は、同じように九州から来た饒速日命・物部一族。
 - その神話は、部族毎に、異なった、又は、部分的な神話であったと推測する。
 - 九州の文化・文物
 - 神武一行が大和入りしたときには、九州の物は一切持ってこられなかった。
 - 大和朝廷成立期に、改めて九州から持ち込んだ文化・文物は、この時に抹殺された。
- 二代目の綏靖天皇以降は、九州から受け継いだものは、神武の遺伝子のみ。
 - 従って、糸島・平原の華麗な文物は、直接的には、何も引き継がれなかった。
 - それ以外は、饒速日命と物部一族が持ち込んだ、九州の文物のみ。

大和朝廷成立期に 力を持った勢力

- 初代の神武天皇の時代
 - 九州から来た道臣命が最高執政官となった
- 手研耳命の反乱で、
 - 九州から東征した人々は、全て排除され、
 - 神武の血筋を持った綏靖天皇が後継者に、
 - 事代主は、神武・綏靖・安寧の初期三代の天皇の正妃を出している。
 - これは、後に栄華を誇った藤原道長の例に近い。
- その後の最高執政官と王妃・皇后には、
 - 饒速日命の二人の息子の天香語山命と宇摩志麻遲命(可美真手命)の子孫が名前を連ねる。
 - 事代主の息子の鴨主命(天日方奇日方命も、最高執政官となった。
- 大和朝廷では、天孫族の血統が天皇に引き継がれたが、実質は、出雲の事代主と饒速日命の一族が支配した。
- 初期に、実質上、最も力を持っていたのは事代主。
 - その後は、饒速日命の子孫達。



成立期の大和朝廷を支えた一族

- 別個に記述され伝承・記録された諸家の系図と、記紀の八代の天皇の關係が明瞭に記されている。

右の図は

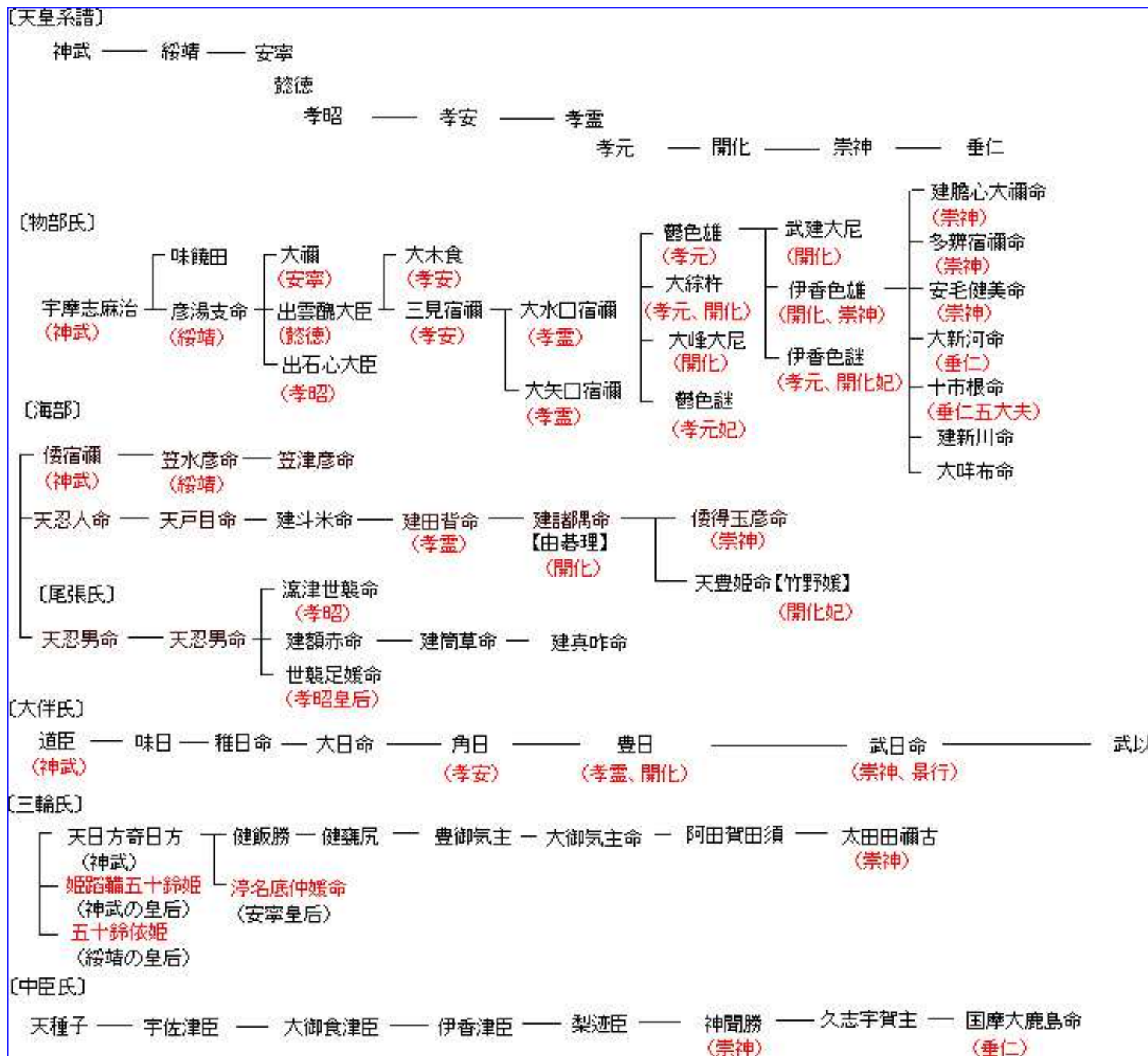
<http://kodai.sakura.ne.jp/nihonnkennkokusi/5-3tennoukeifu.html>

桂川光和氏のHP日本建国史、より

系譜の世代数から推定する実年代より

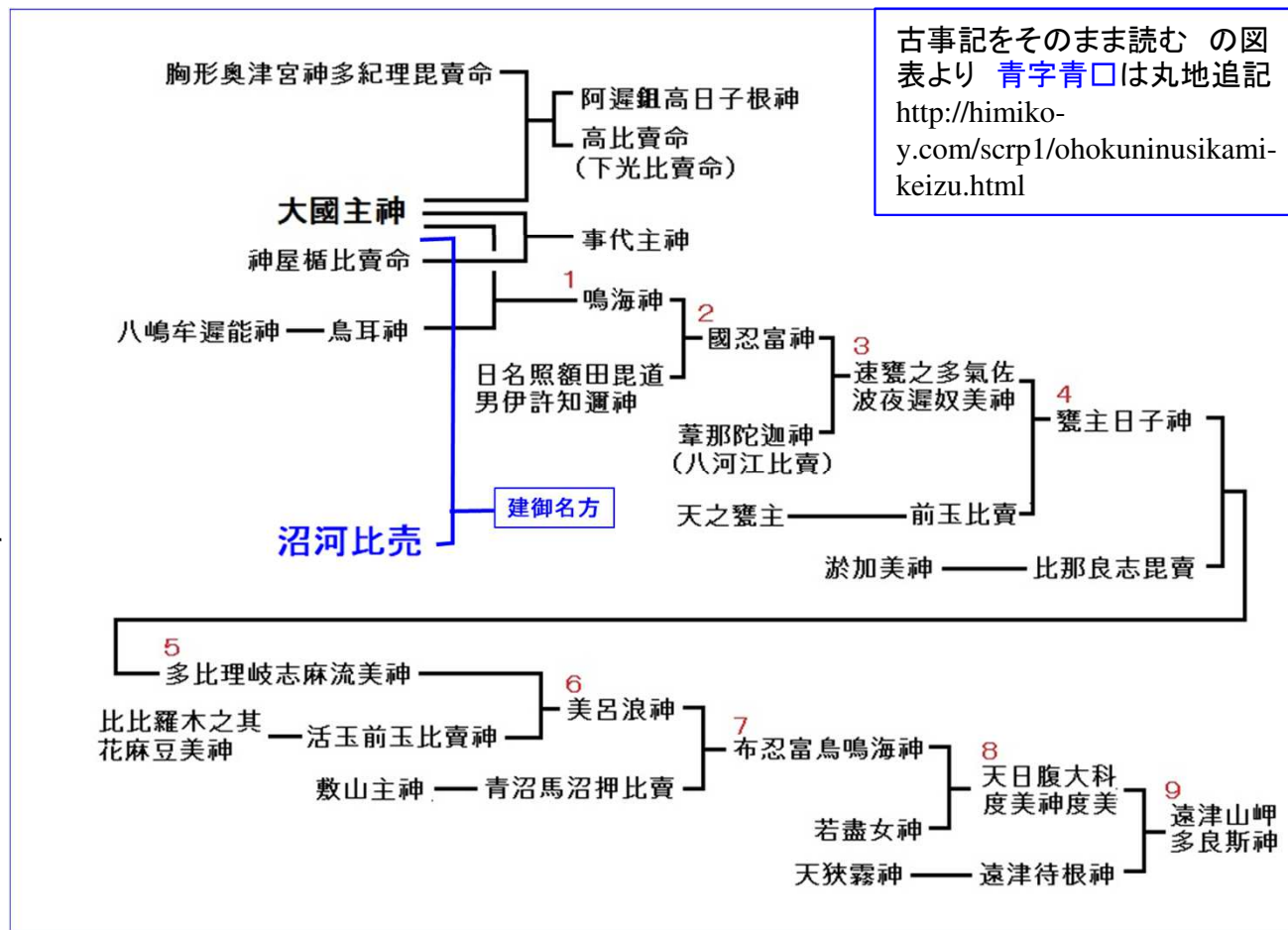
- 赤字は、婚姻又は主従の關係を示す。

同様に、日本家系図学会の宝賀寿男氏も、豪族の系図を示し、各世代の天皇との関連を示している。



出雲神話が多く・天孫族の神話が少ない理由

- 古事記には、出雲神話が多く記載されている。
 - それに引き替え、天岩戸の話以降は、海彦・山彦の話程度で少ない。しかも、出雲の系図に関しては、素戔鳴尊(『古事記』では建速須佐之男命)以降、大国主命までの7代の系図が記され、大国主命の子等が記され、子の鳴海神の子孫が9代の渡り詳細に記されている。
- 天孫族の古い話を知る人々は、手研耳命の反乱の処分で、抹殺されており、伝わっていない。
 - 一部は饒速日命とその一族が伝えたもので、殆どが、成立期に失われた。
- 現実には、出雲族と饒速日命の、一族が、大和朝廷の大半を占めており、出雲一族の系譜は、大和朝廷自体にとって、欠くことのできない、重要な知識であったと推察。出雲一族が重要な役職を担っていたと想像する。
- 出雲の神話は、伝承する人々が沢山居て、朝廷の主要役職を占めており、大和朝廷の人々にとって不可欠な教養となって居たはず。
- 大和朝廷成立期が、判ると初めて、この理由が判り、納得できる。



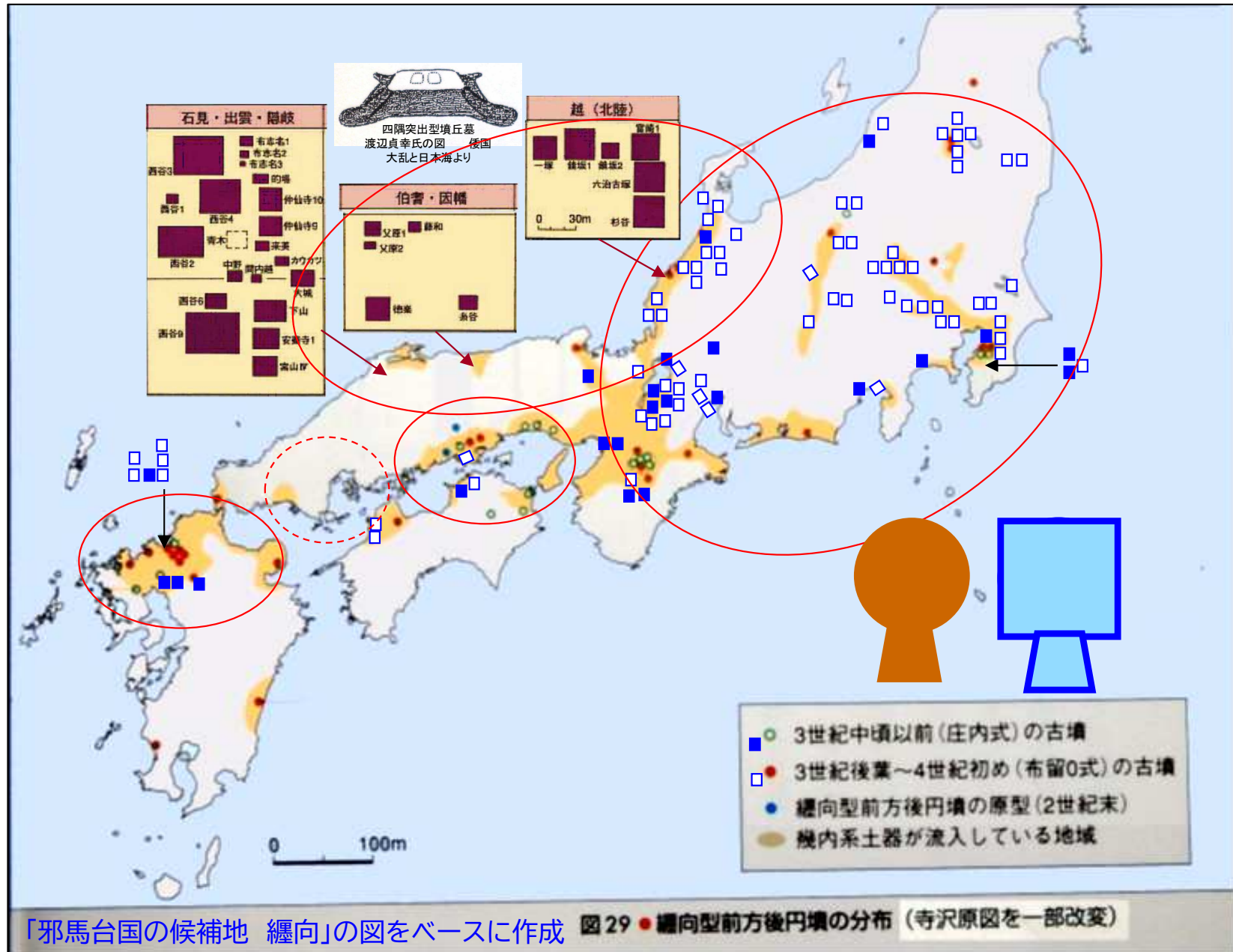
- 成立時の状況は
 - 天孫族の神武方は、極めて脆弱な体制であった。(人員・軍事力)
 - 饒速日命側(天香語山命・可美真手命)側が圧倒的な力を持っていた。
- 基盤を持たない神武側が、不利な体勢を打開し、権力を集約するために打った手は：
 - 政略結婚 : 出雲族の宗主筋である事代主の娘を正妃とした。
 - 饒速日命は、事代主の妹(姉)を妃とし、大国主の女婿として行動した。事代主は、主筋に当たった。
 - 事代主の女婿と敵対する訳に行かず、弱体の神武を支援せざるを得なかった。
 - 大規模土木工事 : 関心事を軍事/争いから、競争で行う土木工事へ振り替えた。
 - 奈良湖が縮小し、無くなることから、新しい膨大な耕作地が生まれ、その分配により、新しい権力基盤を作った。
 - 婚姻と子孫の増加 :
 - 権力基盤を持つ事代主一族/饒速日命の子孫=物部一族との婚姻を通して、姻戚関係を作り上げ、政権実務者との良好な関係
 - 有力な地方豪族の娘を妃とし、子孫を多く残し、地方に天皇の子孫を配置して、基盤を拡大した。
- 欠史八代 : 第2代綏靖天皇から第9代開化天皇までの8人の天皇
 - 記紀に業績の記述がないとの理由で、存在しないとされた8代の天皇の存在を否定するりゆうが無い。
 - 子孫を多く残し、皇孫を増加させることは、初期政権の安定に重要な事績と云える。
 - 政権を担った有力な豪族達の系図が、個々に残っており、その系図と天皇の世代に矛盾が無い。個々別個に作られ残された系図を全て否定しない限り、8代の存在を否定できない。
- 神話のアンバランス
 - 出雲神話が多く記載され、主役であるべき天孫族神話が少なく、誤りが有ることとは、政権成立時の不幸な出来事に理由がある。
 - 天孫族は、成立時に、極く僅かな人しか生き残らず、伝承が残らなかった。
 - 一方、出雲族は、記紀成立の時代まで、生き残り、伝承を伝えることができた。

- 九州の優れた文物が、大和・畿内に伝播しなかった事実とその理由
 - 神武東征は無かったとする考古学者がいる。
 - 主要な理由は、九州の優れた文物が畿内・大和から出土しないから、大量の人の移動は無く、文化の移動は無かったとし、神武東征を否定する。
 - その理由は、合理的か？
- 地名の同一性
 - 北九州と畿内の地名と位置関係の同一性が指摘される。
 - これは、神武東征の証拠となるのか？
- 大和と地方の関係：
 - 多くの歴史家は、無条件に大和の優れた文化文物が地方へ伝播したとするが、その認識は正しいのか？
 - 古墳構築の伝播の速さは、「優れた大和」から「辺鄙で文化を持たない地方」へ人・技術・文化が伝播したとは、とても考えられない。
 - 地方の人の歌が万葉集に残ったのかを検討する。
- 古事記・日本書紀の九州の記述が不正確な理由
 - 北九州で出雲族と戦い勝利し、出雲の国譲りを成功させた後に、神武東征に出発した筈。
 - 先ず最初に移動した先は、豊国の宇佐。
 - 次に、筑紫の岡田の宮

大和に、九州の文物が直接渡らなかったのか？

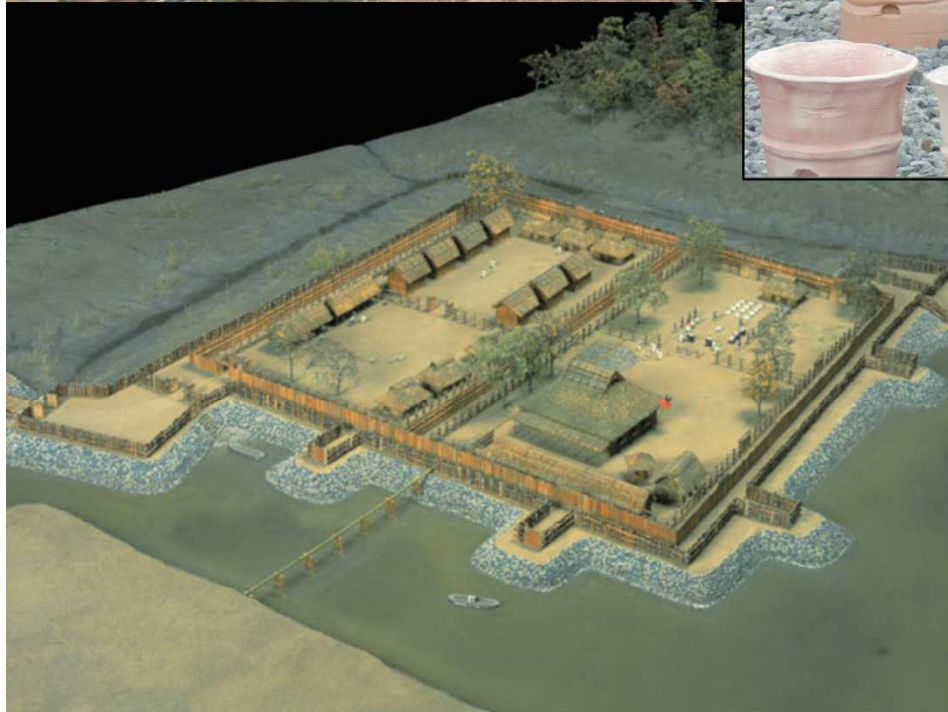
- 神武東征では、文物は、直接渡ることは無かった。
 - 熊野灘での海難事故により、九州の文物は、ほぼ全て、喪失し、大和まで持ち込めなかった。
 - 平原王墓の直径46.5cmの日本最大の銅鏡「内行花文鏡」と同様の鏡を、神武達は、船に乗せ一緒に運んだと推定するが、鏡は約8枚もあり、熊野の海難事故の際には、捨てざるお徳なかったと推定。太刀・玉も同様に、失ったものと考える。
 - 考古学では、土器を標準的な遺物として重要視するが、神武東征では、海難事故に際して、持ち込もうとしていた土器は、全て、失われたものとみる。
 - 大和入りした後も、東征した九州出身者は、人数としてもわずかで、かつて敵対した人々に囲まれ、政治的優位性を保つために働いており、ゆっくりと、九州との交流を行う、余裕もなかったと考える。
 - 出身地の糸島・平原地区と人々にとって、東征軍に参加したほぼ全ての人が死亡したことから、大和まで、行くことや、文物を送り出す意思・意欲も失せていたのでは？
 - 手研耳命の反乱処分で、九州とのつながりは、薄くなって、九州から文物をもって来させることは出来なくなったと推定。
- 一方、同じ天孫族の饒速日命とそれに随行してきた物部一族
 - 九州出身であり、皆、生存しており、成功者になっていた。故郷の九州の文物や、人々を受け入れたはず。
 - 神武東征以前から、彼等が行ってきたことの延長であるはず。
 - ただし、彼等の故郷は、糸島・平原ではなく、北九州の別の地域と思われる。
 - もしかすると、太宰府の南の地区、夜須・甘木からの出身者も多かったのかも知れない。

第一次古墳ブームの築造地域



初期(庄内式・布留0式の時代)の古墳の内、前方後方墳の割合は、旧出雲系の支配地域に多いことに注目

群馬県・高崎市
三ツ寺 I 遺跡復元模型と
保渡田古墳群
(かみつけの里博物館資料より)



何故、地方の人々が躍動し、地方の人の歌が万葉集に残ったのか

- 663年の白村江の戦で大敗した後に、日本防衛のため九州に防衛拠点が築かれ、全国から、防人が集められた。**防人の歌**が詠まれたのは、その時期で、万葉集として編まれたのは、759年以降。
 - 大和朝廷成立期は、紀元250年頃から350年ほどの期間のことで、防人の歌を云々するのは、遠すぎるような気がする。私の古代史は、当面、この古墳時代の前期までしか取り扱わないので、話題として取り扱う機会が無さそうなので、ここで、若干の感想を述べさせて頂く。
- 防人の歌は、およそ100首あり、関東地方のものも多く、筑波山、久慈川、箱根、千葉などの地名の入ったものもある。
 - 別離の悲しみを、おおらかに、直接心に響く表現で歌い、高い評価を受けている。
- これだけの歌を詠むことのできる教養人が、畿内から遠く離れた地方に、沢山居たことは驚異に値する。
 - 現在の標準的な歴史観では、「大和の進んだ文化が、やっと地方まで、広がった証だ。」などと言われるが、これには、違和感を感じる。
 - 出雲の大国主命が築き上げた、九州から会津を含む東北地方までの全国規模の支配体制と、地方と中央を結ぶ交流体制があり、地方の豪族達が、中央の文物を目にし、手に取り、地方に伝え、地方独自の高い文化レベルをきずいていた。その体制が、大和朝廷の成立期には、続いていたものと推測される。
 - 畿内からずっと離れた群馬県榛名山東南麓で、5世紀後半(古墳時代)の火山灰に埋もれて発見された、水濠で囲まれた豪族の館と、周辺にその墳墓と見られる前方後円墳が、発掘された。
 - 人物・動物埴輪などが、「かみつけの里博物館」に展示されている。古代人の生活のたくましさ、技術の素晴らしさから、当時の、畿内から遠く離れた地域の、文化レベルの高さを知ることができる。
 - 大和朝廷成立期以来、豊かな地方豪族が存在し、その地方豪族が、高い教養と文化を持ち、短歌を詠う人々が沢山居た。その豪族が、大和政権を支えたものと推定する。
 - 大和朝廷の政治支配体制は、不詳だが、中央集権体制とは想像し難い。
 - 地方分権・地方が豊かな体制であったと推定する。
 - その地方分権の代償として、豪族の負担で、防人が派遣されたと考える。

防人の歌の例

- 行田市の八幡山古墳の脇にある万葉集巻二十の防人歌碑。
 - この地に住んでいた藤原部等母麻呂が詠んだ歌とその妻が詠んだ歌
 - 足柄の御坂(みさか)に立(た)して袖振らば家なる妹はさやに見もかも(藤原部等母麻呂)
 - 色深く背(せ)なが衣(ころも)は染めましを、み坂給らば、まさやかに見む(妻物部刀自賣)
- 歌の大意は、
 - 夫の等母磨が「防人として西国に行く途中、足柄峠で袖を振ったならば、家に残った妹(妻の意味)にも、はっきり見えるであろうか。」
 - 妻からは、「もっと色を濃く背(夫)の衣を染めればよかった。それなら、足柄のみ坂を通ったら、はっきり見えるであろうに。」と唱和したものです。
 - 地理的には行田から足柄峠は見えるわけがなく、出発前に衣の色にことよせて、別れの悲しみを夫婦間で取り交わした歌です。
- 行田市教育委員会のHPの写真と説明文より



古事記・日本書紀の九州の記述が不正確な理由

- まず、景行天皇の九州討伐のことを思い出します。
 - 日本書紀によると、第十二代景行天皇は、六年間、日向(宮崎県)に滞在した。
 - 目的は熊襲討伐。(宮崎県が、父祖の地では、全くあり得ない)
 - 宮崎の地を好み、美波迦斯毘売(ミハカシビメ)を娶り、6年間滞在。生まれた子は、国造になった。
 - 日向という地名を命名。
 - 景行天皇の九州遠征の記事には、父祖の地を探したものは無い。
 - この長期にわたる九州遠征の結果、日向:宮崎の記録と記憶が強く残った。

父祖の地の記憶は、大和朝廷成立期に失われた。

- 同時に、九州の地理に関して、情報が失われた。

- 父祖の地:日向を表す漢字と景行天皇遠征時に親しんだ日向を示す漢字が同じであることから、地理の情報も失った後世の識者が、誤って日向を、「ひゅうが」とし、景行天皇の行った地であると理解し、新たな地理概念に基づき、伝承された神武東征の出発点を宮崎とし、筑紫の岡田宮の後に訪れた宇佐の地が、経路的におかしいと、順番を勝手に変更し、宮崎を出発し、宇佐により、岡田宮へ移動したことに書き換えたものと推定する。

- 失われた父祖の地の情報が、景行天皇が楽しみ好んだ宮崎の地の情報に、誤って置き換えられたもの。

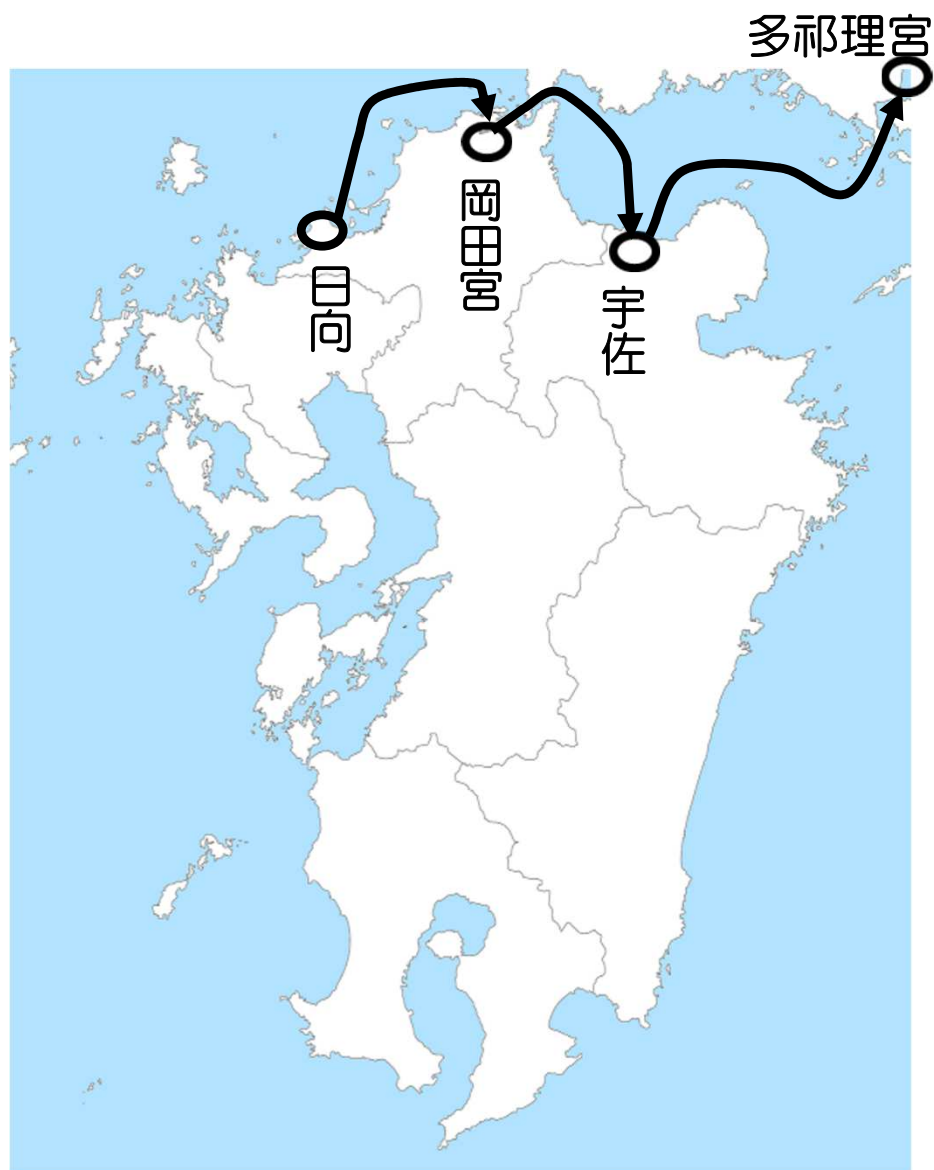


上田正昭氏の「私の日本古代史より」



誤った九州の知識に基づいた伝承の変化

本来の東征のルート



誤った知識・記憶により変えられたルート

